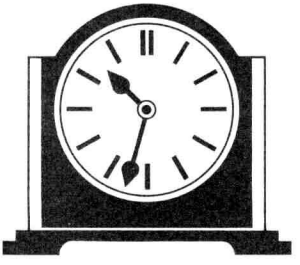
批評の方法⑫

ケネス・バークの方法



赤祖父哲二
栗原　裕　訳

大修館書店

批評の方法 12
ケネス・バークの方法 © T. Akasofu Y. Kurihara 1974

1974年4月10日　初版発行

訳者との協定により
検印を廃止する。

訳　者　赤祖父哲二
　　栗原　裕
発行者　鈴木　敏夫

株式会社 大修館書店
(101)　東京都千代田区神田錦町3-24
電話　東京 (294) 2221 (大代表)
振替東京 40504

印刷／壮光舎　製本／大成社

ケネス・バークについて

ケネス・バーク（Kenneth Burke）は、一八九七年五月五日ペンシルヴァニア州ピッツバーグに生まれ、オハイオ州立大学とコロンビア大学に学ぶ。きわめて多才で、音楽批評や独仏文学の翻訳を手がけた（一九二七年から『ダイアル』誌、さらにその後『ネイション』誌の音楽批評を担当）。批評理論もマルクス、フロイトばかりか伝統的形而上学を独自な方法で消化し、早くから意味論的な分析法も確立していた。このほか小説や詩集まで発表し、そのユニークさで教祖的な影響力を一部に及ぼしている。『反対陳述』(*Counter-Statement*, 1931)，『永続

と変化』(*Permanence and Change*, 1935),『歴史にたいする態度』(*Attitudes Toward History*, 1937),『文学形式の原理』(*The Philosophy of Literary Form*, 1941),『動機の文法』(*A Grammar of Motives*, 1945),『動機の修辞学』(*A Rhetoric of Motives*, 1950),『宗教の修辞学』(*The Rhetoric of Religion*, 1961),『象徴行動としての言語』(*Language as Symbolic Action*, 1966),『ドラマティズムと発達』(*Dramatism and Development*, 1972).(小説は *The White Oxen and Other Stories*, 1924, *Towards a Better Life*, 1932, 詩集は *Books of Moments*, 1955).職歴としては三十年代から、シカゴ大学やベニングトン・カレッジなどの教壇にも立って今日に及んでいる。

赤祖父　哲二
栗　原　　裕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次

ケネス・バークについて……iv
一　〈戦略〉と〈状況〉、〈祈り〉と〈海図〉……3
二　象徴儀礼の構造……26
三　象徴行動論の系譜……41
四　〈ドラマティズム〉と〈レトリック〉……62
五　「よりよい生」のために……92
原注……111
訳者あとがき……113
索引……122

ケネス・バークの方法

一　〈戦略〉と〈状況〉、〈祈り〉と〈海図〉

本というものが、ケネス・バークが何回か主張したように、一つの文をどこまでも拡張したものだとすれば、批評の方法とは、その文を実証するための資料を確保することにすぎなくなる。実際、バークはたくさんの文、すなわちたくさんの方法を一冊一冊の著書のなかにもっているが、彼が一つの文に運命をかけなければならないとすれば、その文はおそらく「文学は象徴行動である」ということになろう。強調点を変える彼みずからの技巧を使えば、彼の初期の著作では象徴的な行動が強調され、後期の著作では象徴的な行動が強調された。無限ともいえる生産力でバークは、彼自身の秘術をもいくつか含め、批評の秘術をつくしてあらゆることを成した。しかし、現代批評のあらゆる側面をみずから代表するか（この場合には彼は人にかわって本を書いたことになる）、それとも彼がとくに専門とした、象徴表現という批評領域に彼の好むままにたてこもり、それが自分以外には誰も正しく扱うことはないものだという要素を加

えるか、どちらかを選ばなくてはならなくなる。「本質的なものの問題」という論文（『動機の文法』*A Grammar of Motives* の付録として再録されたエッセイ）において、バークは軽率にも次のように書いている。「私は文法（グラマー）・修辞学（レトリック）・象徴学（シンボリック）という三分野について語ることから始めた。現代批評が文学の研究者に何かほんとうに新しいものを提供するのは、この三つの範疇の三番目だけかもしれない」と。彼みずからの著作が示しているように、この発言は真実ではないけれど（「ほんとうに」という語で逃げ道さえつくってあるが）、それはバークの象徴行動の研究における目新しさが与える途方もない衝撃をたしかに示している。だから、彼の著作を初めて読む人は誰でも、自分の裏庭に突如として新しい国が発見されたかのような感覚をもつのである。

一九三一年出版の『反対陳述』（*Counter-Statement*）は、バークの最初の批評論であり、彼が後年発展させた原理と方法をほとんど作りあげていた。「反対」という語は、その原理・方法が当時は（いつもそうなのだが）少数意見であったからつけられたものである。この本は論文集であって、定期刊行物にのったものを改めたのがいくつかあり、彼の美学のなかに暗にひそむ政治綱領を含めて文学についての一般的な問題や、またフローベール、ペイター、ド・グ

ールモン、トーマス・マン、ジードなど個別的作家を扱っている。この時には「象徴行動」という概念はまだ熟していないが、たえずちらちらそれを暗示していた。すなわち、ジードが同性愛に関心をもったため、「逸脱の感覚」を訓練することによって政治的リベラルとなったこと、グールモンの「紙の上での」犯罪は彼の癩病と隔離の結果であったこと、伝記作家はナポレオンを書こうと選ぶことでみずからの問題を「象徴化する」ことなどである。また、象徴行動を研究するため彼が後年に発展させた技術も、いくつかは暗示されていた。とくに心象の文脈中における連合作用であり、たとえばブラウニングが「未来」という語を自信あふれて使ったのにたいして、シェイクスピアが悪意をこめた文脈で用いたとか、「悪魔」がキーツにおいては力をもつが、テニソンにおいては反対の無害なものになったとかいう指摘である。

しかしながら、この本の主要な関心はレトリックにある。「時事小論文書き」対「探究」、「演説風」対「写実的」、「形式の心理学」対「情報の心理学」などの二分法的用語はあるが、「象徴学」という分野を表わすもう一つの用語がそれぞれになく、文法からレトリックを区別することに関心が向けられている。事実、この本でバークが芸術は経験ではなく、経験につけ加えられた何かであると強く主張しているのは、象徴行動という概念とは反対の考えを強調したこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

とになるけれど、その場合も形こそ変われ、低俗な経済的因果関係という概念を攻撃して、彼は後年の見解の芽を提示している。

ある意味で、芸術や思想は状況を扱う方法なのであるから、状況を「反映」する。しかし、人がある問題を解くとき、彼の解決は解かれる問題によって「ひき起こされる」のだというべきではない。その問題は彼の解決の性質をいくらかは制限するかもしれないが、彼がその解決法をつけ加えるのでなければ永遠に未解決のままになりうる。同様に、思想家や芸術家が状況に対抗するため発展させる、物を感じ見る個々の方法、思想家や芸術家が目立たせる語彙、その状況を包囲するためにふさわしい象徴の発見によって、彼らの作品が可能にする特別な種類の知的にして情緒的な調整や、さらにその状況にたいする態度によって彼らが刺戟する類の行動は、彼らが扱う予定の状況によって「ひき起こされる」のではない。

軍事の隠喩はないが、ここには、芸術作品は状況を包囲するための「戦略」、すなわち象徴行動であるという概念の全体がある。『反対陳述』は、それが芸術におけるレトリックの概念を発展させるためにきわめて重大であること、また後年の象徴学をそれが暗示していることのほかに、主として芸術にたいする情熱のゆえに興味深い。「芸術の地位」という論文は、シドニーやシェリーが争わねばならなかったよりずっと巧妙な非難者にたいする精密な「詩の弁護」である。「トーマス・マンとアンドレ・ジード」は二人の間に倫理的な区別を打ち立てようとし

て十ページを費し、さらにその区別を単純すぎるものとして破壊するという慎重さの練習となっている。「政治綱領」、「レトリック辞典」、「用語法の応用」は皮肉な三幅対の論文で、その三つはそれぞれ、バークが理解している「よい生」の目標を定め、その綱領の基底にある諸概念を定義し、それらを芸術の問題に応用している。

バークの次の批評論である『永続と変化』（副題として「意図の解剖」）（*Permanence and Change: An Anatomy of Purpose*）は、一九三五年に出版された。これは彼の著作のうちでもっとも「文学的」でない本である。もっとも、正確にいえば、社会心理学か、社会史か、哲学か、道徳の可能性か、「世俗的改宗」か、いずれにしても分類はむずかしいだろう。その主要な関心は、彼の『動機の文法』と同様、「意図・目的」（「動機」、すなわち「態度」や「戦略」の基礎をなす状況）に向けられており、三部から成っている。まず「解釈論」で、芸術よりも現実の人生のさまざまな領域における「批評」を概観する。次の「矛盾による展望」は戦術の隠喩的性格と意味の組織を探査し、「単純化の基礎」はバークが以前に論じた混同を明らかにし解決しようとする、批評の枠組みの見取り図である。したがって、これは社会と社会における伝達行為についての本であるが、その中心的隠喩（彼が後になって、この本の「代表的な逸

話」と呼ぶであろうもの）は「芸術家としての人間」という句であり、詩と批評の技法によって社会問題を扱っている（とくに、この本の主題を示す文が「生きものはみな批評家なり」であるのは、その特徴をよく表わし――バークと同姓のエドマンド・バークがかつて計画したよりもずっと批評を大衆化したことになるが――また最終節で「人はすべて詩人なり」と述べている）。この本でバークが象徴行動についていわねばならないことは、ほとんど「矛盾による展望」の部に出ているが、まさに所を得ている。たとえば、高貴な木を切り倒すこと（それはいつも彼の興味をとくにひいていた主題であるが）は象徴的な親殺しであろうし、またダーウィンの強い目まいの発作は、ジョイスの盲目と同じように、自分の仕事の「瀆神」にたいする象徴的な自己懲罰と考えられるだろうということ、登山や闘牛から帝国建設に至る行為は実質的な象徴の要素を含むこと、さらにマクドゥーガルの統合・分裂の心理学は、大英帝国の構造と類推の上で関係をもっているが、現実にその投影なのであり、とくに大英帝国の患者に治療効果をあげるだろうということなどをバークは述べている。こういう象徴論風の読み方をひんぱんにしながらも、「戦略としての芸術作品」という考えはまだ固まっていず、この本は「戦略」という用語をただ術策の意で使う傾きがあった。だから、できるだけ外交的に自分の動

機を合理化することが「戦略的」とされたのである。

『永続と変化』の中心概念は、「矛盾による展望」、あるいは隠喩であり、あることを多少なりともそれとは違った何か別のものとして見るという考えである。バークは次のように書いている。

> あらゆる学派を含めて科学研究の全業績がさまざまな分岐をするが、みな一つの豊かな隠喩の忍耐強いくり返しをほとんど出るものではないということを、科学の研究資料が積み重なるにつれて、ほんとうにわれわれは理解しつつあるのではないか。だから、歴史上のいろんな時代において、われわれは人間を神の息子として、動物として、政治・経済的な煉瓦として、機械として考えてきた。そのような隠喩は、まだそのほかたくさんあるが、それぞれ、無限に続く資料と一般法則にとって手がかりとして役立つ。

「矛盾による展望」とは、バークの定義では、彼がニーチェとその弟子のシュペングラーのなかで初めて着目した方法であり、用語をあたり前の文脈から、不敬ではあるが啓示的な別の文脈に移し変えることをさす。それはちょうど、「アラブの清教徒主義」とか、エリオットの「退廃したスポーツ精神」ということばや、ヴェブレンの「訓練された無能力」ということばについて語るようなものである。バークはこの本のなかで「矛盾による展望」を広く応用して

いるが、結局のところ、その「矛盾による展望」は彼の後年の著作における主要な象徴行動である「再生」というような概念をさえ含むに至る。

一組の新しい意味がしっかり確立されると、われわれは別の種類の退行現象を芸術のなかによく見出すことができる。すなわち、芸術家は若いときの記憶が疎外感と親近性の両方を結びつけるがゆえに、突然その記憶をふり返って見るよう促されるものである。誰でもおそらくこういう再生の時期、つまりそれまで忘れていた多くのものが突如として役立つか関連あるものとなり、ふたたび思い出のなかで生気を帯びるような新しい角度の視野をもっているだろう。かくて、「再生」と「矛盾による展望」は同義で、「改宗」の過程とみなされる。もっとも、「改宗」と「再生」というような語はふつう、そのような方向転換のうちでもっとも壮観な、宗教上のそれのためにのみとってあるのだが。

この本のなかでバークのもっとも特徴的な「矛盾による展望」は、たぶんソーローからの借用で、直観や皮肉の主な源として使われたかもしれないが、新鮮な、すなわち「再生の」観点を求めて語の根幹の意味までもどる語源探索なのである。たとえば、「理論（セオリー）」は「神の幻（ヴィジョン）」を意味するとか、「諷刺（カリカチュア）」はある語根の意味から「積みすぎ（オーヴァーロード）」まで至ったものであるとか、「財産・特性（プロパティー）」と「妥当性（プロプライアティ）」が語源の上でたいへん近いのは、「たんに偶然によるのではない」などと記している。

『永続と変化』は一般的な文学論議をかなり含んでいる。だが、個別的な文学上の言及は多く付帯的なもので、実例か類推として使われており、詳しく論じられていない。たとえば、『魔の山』におけるニーチェ風の山の象徴についてちらっと言及しているほか、シェイクスピアが使った文体による気嫌とりの技巧のいくつか、ジェイン・オースティン流の精緻さによって暴力を描くヘミングウェイの意図的な不調和、ニーチェやスウィフトの作品における自己流の怪物退治という不適切な悪魔ばらい、エリオット、ミルトン、ハート・クレインにおける「深淵のモティーフ」、ロレンスの「倫理的な宇宙の建設」などである。この本で引用され、かなり長く論じられている唯一の文学作品は、奇妙なことにエドウィン・シーヴァーの社会学的な小説『仲間』であり、詩は一行もどこにも引用されていない。

バークの次の著作は、一九三七年発行の『歴史にたいする態度』(*Attitudes Toward History*)で、象徴行動の見地からもっとも重要なものである。これについては、後にいくらか詳しく論ずることになろう。「象徴行動の研究」という副題のついた『文学形式の原理』(*The Philosophy of Literary Form: Studies in Symbolic Action*)は一九四一年に出版されたもので、『歴史にたいする態度』における諸概念を実際に応用した補遺と考えてほとんどさしつかえない。長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook